

九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2026



所 属： 人文学科 こども専攻 保育コース

名 前： 水 町 愛

作成日：2026 年 6 月 1 日

九州ルーテル学院大学 ティーチング・ポートフォリオ

教員氏名：水町 愛

所属：人文学部 人文学科 こども専攻

1. はじめに

このたび、ティーチング・ポートフォリオの作成を通し、自らの教育活動の方針や取り組み、またその成果を様々な根拠に基づいてまとめることとする。またこれを、自らの教育活動全般を見つめ直す良い機会とし、今後の改善にも役立てたい。

2. 教育の責任

本学における私の教育に関する責任は、主に人文学科保育・幼児教育専攻における専門教育科目の担当である。担当科目は主に音楽実技系の演習であり、受講生の多くが幼保系施設に勤めることを目指すことから、まずは指導実践に必要とされる技能の習得を主に目指す。特に幼稚園教諭免許取得に必要な科目として本学独自に開講する教科においては、基礎技能を向上させるとともに、多角的に見た応用実践力を磨くことに力を入れており、その点に4年制大学の養成課程で学ぶ意義と価値を持たせたいと考えている。

音楽実技については、受講生の入学時点の経験値やスキルに大きな個人差があるというのが実態である。特に初級レベルで学習をスタートする学生には、長期的かつ継続的な指導の必要性が求められる。同時に、技術的な鍛錬を積みながらも音楽に対する豊かな感性を磨くことや表現する喜びを味わうことは必要と考え、その意味で、受講生が意欲と関心を高め続けるための手立ても工夫している。

幼児期の子どもにとって、音楽との出会いやかかわる経験は心身への成長をもたらす。その実現に直接かかわる人材の育成においても、スキルの習得に加えた感性教育にも力を注ぎたいと考えている。

2.1. 授業科目の担当

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
こどもと表現 I	2024－2026 前期	30 名程度	専門教育必修
器楽 I	2024－2026 前期	週 2 コマ総計 30 名程度	専門教育必修
器楽 II	2024－2026 後期	週 2 コマ総計 30 名程度	専門教育必修

音楽表現Ⅰ	2024－2026 前期	25 名程度	専門教育必修
音楽表現Ⅱ	2024－2026 前期	25 名程度	専門教育必修
音楽表現Ⅲ	2024－2026 後期	25 名程度	専門教育必修
フレッシュマンゼミ	2024－2026 前期	30 名	共通教育必修
チャイルドケアゼミ	2024－2026 後期	30 名	専門教育選択
教育保育実践演習	2026 後期	35 名程度	専門教育必修
保育内容の理解と方法Ⅱ	2024 年度前期	30 名程度	専門教育必修
保育内容の理解と方法Ⅲ	2026 年度前期	30 名程度	専門教育必修
特別研究	2024－2026 後期	平均 5 名	専門教育必修
卒業研究	2024－2026 後期	平均 5 名	専門教育必修

■ 主要担当科目

「こどもと表現Ⅰ」

本科目は、幼児期の音楽表現活動の歴史やねらいについて学ぶと共に、幼児の発達と表現の姿についての理解を深める。また、これらの実践を支える保育者の役割について考え、必要な基礎技能としての読譜力と表現力を磨く。また、映像資料等で音楽表現活動の具体的な実践事例についても触れ、模擬実践等を通して幼児の発達と感性に即した豊かな表現活動の在り方と導き方について深める。

読譜に必要な基礎的な音楽理論の理解においては、実技を伴うソルフェージュの課題を通してリズム感や音程感を身に付け、読譜力を向上させることをねらいとする。具体的には、リトミック演習によるソルフェージュを通して音楽のしくみを身体で体得する方法を取り入れることにより「分かる」から「表現できる」へと繋げる工夫をしている。

「器楽Ⅰ」「器楽Ⅱ」

これらの科目は、幼稚園教諭免許取得希望者を対象とし、保育実践スキルの一つとして求められるピアノの基礎技能を習得することを目標に、複数人の兼任講師と共に個別の実技指導を展開している。「器楽Ⅰ」ではピアノ演奏技術の基礎を学ぶとともに、練習方法と練習習慣を身につけ、読譜力を養いながら技術の向上を目指す。「器楽Ⅱ」では、さらに基礎技能を伸ばすことに加え、多くの弾き歌い課題に取り組み、実践力を向上させる。

「音楽表現Ⅰ」「音楽表現Ⅱ」「音楽表現Ⅲ」

これらの科目は幼稚園免許取得希望者を対象に開講している。保育士・幼稚園教諭を志す学生が、基礎技能から応用的な実践演習までを（入学から卒業まで）通して学び続ける体制を用意している。ここでは主に、音楽を手段として用いた保育活動を実践することができるための力をつけることをねらいとしている。2年次には、コードの理論や

コード伴奏法を習得することにより、伴奏や弾き歌いの技術を向上させる。また、歌唱活動を取り入れた保育の模擬実践を重ね、相応しい実践の在り方について学ぶ。3年次では「教育」という視点から音楽を保育実践の手段とすることができるようになることを目指し、歌唱指導法、合奏指導法、指揮法などを扱い、それらに必要な知識理解や技術の習得を行う。また、様々な音楽教育メソッド等の考え方に触れ、幼児期に行う音楽を用いた活動のねらいについて考察する。4年次では、リトミックに関する理論と指導法について学ぶ。習得した知識や技術を用いた模擬保育を行うことや、リトミックをしている子どもの様子を観察することなどを通して、実践力や応用力を養うとともに、音や音楽に対する感性を豊かにする。このほか、弾き歌い発表の機会を多く設けることで、練習の習慣をつけ、人前での発表に慣れることをめざす。また、互いの発表を聴き合う中で望ましい表現について学ぶ。

2.2. 教育組織運営

組織運営においては、学生支援委員、相談員を務めるほか、アウトリーチセンターにおいては、センター運営委員および地域連携推進部門とグローバル推進部門の委員を務める。学生支援委員の立場としては、学生の教育環境を整え支えることに携わっている。また、アウトリーチセンターの運営委員としては、大学や学生と地域を繋ぐ役割として、また学生の留学体験や異文化圏体験学修の機会を支援することに携わっている。

3. 教育の理念

教育理念としては、以下のことを挙げる。保育士および幼稚園教諭の養成に携わる立場においては、対象学生との接点が授業やゼミ指導に留まらず、4年間にわたり多くの面で密に関わりを持つこととなる。そのため、これらの理念をもって接する機会は授業やゼミ指導以外の多くの場面において持たれる。

3.1. 理念1 「基礎の徹底をはかることで苦手意識や音楽嫌いをなくす」

音楽指導において、音楽実技を手段とする豊かな活動実践を展開できるようになることを目指すためには、基本的なリテラシーとしての読譜や基礎技能の習得を徹底する必要がある。これら初期段階の学習においては、音楽のもたらす楽しさなどはなかなか実感しづらいものである。しかし、この段階の学習が徹底することによりその先の応用実践においてテクニックの自由度が増していくことを踏まえ、初期段階の基礎の学びはトレーニング的な要素を強め、個別の習熟度チェックや小テストなどを多く用いながら取り組んでいる。そのことによって苦手意識を取り去ることが、先の豊かな学習へと展開していくことを実感している。苦手意識を持つからこそ徹底して基礎を定着させることの意味は大きいと考え、受講生にはその意義を伝え、休まず努力を積むことの重要性を伝えている。

3.2. 理念2 「集団での学び合いを生かし、個々の関心意欲やスキルを高め合う教育」

実技演習分野は特に、個々の取り組みの質や量によってスキルの伸び方も異なる。とりわけ一斉授業においては個々のスキルの伸びがそう期待できないようにも思われるが、必ずしもそうではない。集団での学びの場でこそ育つ要素があることを日々実感している。

担当する授業においては後の4.2.に記すような方法でこれらの指導を実践しているが、指導者がモデルを示すよりも、また望ましいあり方について理論的に説明するよりも、同じ受講生同士という立場の取り組みに触れることにより、より多くの刺激や影響を受け合う様子が見受けられる。特に、共感的に課題を捉え、自らに置き換えて改善策を考えることができるなどの点が大きなメリットである。音楽技能に関しては、整った模範的なものに触れると、学習者が自らの持つ実力や現状から離れたレベルのテクニックであるように捉えがちである。互いの良さを認め合う雰囲気の中、経験値の異なる様々な学生の一人一人が主体的かつ意欲的に取り組むために、集団で学ぶ一斉授業であるからこそその可能性を感じている。

3.3. 理念3 「愛を教育の根幹に」

キリスト教主義教育の環境で学ぶ学生にとって、また卒業後様々な形で子どもの成長発達に寄り添う職業に就くことを目指す学生にとって、学生時代に関わる人間との間に「他者を思いやる気持ち」「自分や相手を大切に思う気持ち」を実感する経験は糧になると考える。知識や技術を豊富に蓄え、責任ある立場としていざ子どもやその家族と向き合うとき、最終的に問われるのは人間性ではないかと考える。関わる学生との間においては、人との間にこそ実感できるぬくもりを持ち、「愛され大切にされている」という実感が得られる関係づくりを心掛けている。

4. 教育の方法

教育理念との関係では以下の点を重視した教育方法を取っている。

4.1. 読譜指導の徹底

ピアノ演奏や歌唱の技能について、授業では入学年度の1年間のみ個別指導を行う体制を構えている。そのため、初年度の一年間においては、学生がいかに自力で読譜する力を養うか、またその後のスキルを継続して向上させるための鍛錬の方法を学び練習習慣を身に付けることができるかは重要である。一人一人の持つ音楽スキルに自由度を持たせることにより、これを用いた実践が豊かに展開していくことを可能にする。そのため、読譜に必要な基礎知識や音楽理論、また演奏のための基礎技能の習得においては、指導の徹底および小まめな習熟度チェックをおこなっている。

4.2. 発表と相互評価の場を多く設定する

学生が個々に表現スキルを伸ばしていく過程において、並行して発表および相互評価の機会を多く設けるようにしている。資格免許取得のための保育実習や教育実習、就職採用試験、そして幼保系施設への就職後を想定し、練習の成果を用いて実践に取り組むということに備えては、学びの段階において緊張の場を数多く経験することが不可欠と考える。また、望ましい表現のあり方について学ぶための一つのプロセスとして効果的と考えているのが、相互評価を取り入れることである。演奏や表現スキルを高めることの前に、見る目や聴く耳を肥やすべく、他者の発表を評価する立場を多く経験できるようにしている。これを通し、課題点に気付く視点を持つとともに、目指す到達点を具体的なイメージとして持つことは、ひいては自らに求めるイメージが明確になると考えている。また、子どもの目に映る保育者の姿を客観的に捉え、自分自身の在り方を見直すきっかけにもなっているようである。学生主体の双方向的な学習の実現においても効果の高い方法であると実感している。3年次の童謡歌唱発表会や4年次の卒業演奏発表会は、授業の一環ではあるが、大学チャペルのステージでの発表会を催し、在学生や保護者を客席に招くなどして有意義な成果発表の場としている。

4.3 語彙や表現力を豊かにするための取り組み

応用実践的な授業において多く取り入れているのが模擬保育の実践である。歌唱等の音楽表現活動を取り入れた保育実践において、乳幼児期の子どもと向き合う保育者には、とりわけ感覚や感性の豊かさが求められる。子どもの表現を受容する感覚、子どもの想像する世界に寄り添う感性、また言葉を用いて思いや考えを共有する力を磨こうとするとき、現代の若者世代の言語環境や語彙の乏しさには課題を感じている。そこで、模擬実践の機会を通して語彙力を高めることを目指し、分かりやすく丁寧な言葉を用いることへ意識を向けることは有意義であると実感している。具体的には、幅広い意味合いを併せ持つ、いわば便利な若者言葉や具体性のない漠然とした表現の幾つかをNGワードとして封じることにより、より丁寧で具体的な表現を意識的に探して用いることを癖づけることに繋がっているようである。子どもへの声掛けにおいて最も大切なことは、子どもの表現の様子を実際に目視でよく観察することであり、そのことによって、より具体性のある言葉を用いた子どもの励みになる言葉掛けが実現するということを伝えている。

5. 教育改善のための努力

5.1. 改善努力1 授業評価アンケートと授業改善報告書

学期ごとに実施される学生による授業評価アンケート結果を受け、その数値評価や自由記述コメントをもとに改善に努めている。担当する科目は主に表現活動を主とする演習科目であることから、全ての受講生の集中力を一定に保つため、受講態度にまつわる秩序を保つことが必要である点などは、これまで課題となった。また、個々の実践力を確実に伸ばす

ため、あるいはそのための実践の機会を全受講生におよそ均等に与えるために、一斉授業の実施方法に課題を抱えてきた。これらの問題を改善させるため、まずは開講初回のオリエンテーションにおいて受講に際する心構えや約束事の徹底をはかることに取り組んでいる。また、毎年度実施方法を少しずつ改善変更しながら、一斉授業の中においても一人一人に対する個別の課題を見出して指導する機会を均一に持つことができる現在のスタイルに行き着いた。今後も学生の声には真摯に耳を傾け、改善を心掛けたい。

5.2. 改善努力2 出席カードの記入とフィードバック

これまで、学期末に行う授業評価アンケートのほか、授業の終わりに Moodle を利用した受講後小レポートを活用してきた。受講生からの小レポートには、その日の授業の感想や要望、質問などが書かれるため、次回の冒頭で説明の補充ができるほか、個別のフィードバックコメントにおいて質問に回答することもでき、大変有効である。また、そこから課題を見出した際には学期末を待たずに改善工夫に取り組むことができる点でも有意義である。

6. 教育の成果・評価

授業評価アンケートにおける数値評価からは、おおよそ平均的に高い評価を得られている。音楽演習を主とする科目の性質上、受講生が主体的かつ実践的に学ぶことができる授業であることから高い満足度が得られやすいともみている。一方、経験値の差のひらきはあるものの、多くの受講生が大学で初めて専門的に学ぶことになる内容においては、可能な限り分かりやすく丁寧に取り扱い、尚且つ小まめに理解度をチェックすることを心掛けている。これらのことにより、最終的な理解度や満足度を高めることに繋がっているのではないかと考える。

7. 今後の教育に関する課題と目標

現状において、担当する科目の授業のほか、学生の実習前や就職試験前にはそれぞれ実技の対策指導を個別に行っている。明確な目的や必要性をもって個々に異なる課題に取り組むこれらの個別指導は、その成果が及ぼす影響から考えても重要視せざるを得ず、優先的に対応している。しかし、授業外の時間をつかつての個別対応には様々な意味で限界があり、この指導時間の持ち方については課題である。これらの段階において指導が必要な内容を一斉授業の中に組み込む工夫や、基礎技能習得段階より一層の挺入れを実践しておくことが今後の目標である。

また、近年の傾向として、学生が個々に実技演習の発表や模擬実践を行うことにおける気持ちの面でのハードルが課題であると感じている。一定の学習成果は得たいが、人前での失敗を避けたいと考える学生と、実践の場を踏む機会を少しでも多く得ることこそが少人数制教育の魅力であると捉える学生が、ある割合でそれぞれ存在する。特に前者はやや増加傾向にあると感じ、ケアや評価において個別の対応が求められる。

8. 参考資料（URL 学内参照）

<担当科目シラバス>

- ・ こどもと表現 I

https://portalsystem.klc.ac.jp/aa_web/syllabus/se0020.aspx?me=EU&opi=se0010

- ・ 器楽 I

https://portalsystem.klc.ac.jp/aa_web/syllabus/se0020.aspx?me=EU&opi=se0010

- ・ 器楽 II

https://portalsystem.klc.ac.jp/aa_web/syllabus/se0020.aspx?me=EU&opi=se0010

- ・ 音楽表現 I

https://portalsystem.klc.ac.jp/aa_web/syllabus/se0020.aspx?me=EU&opi=se0010

- ・ 音楽表現 II

https://portalsystem.klc.ac.jp/aa_web/syllabus/se0020.aspx?me=EU&opi=se0010

- ・ 音楽表現 III

https://portalsystem.klc.ac.jp/aa_web/syllabus/se0020.aspx?me=EU&opi=se0010